

8011 今年の初めに亡くなったイギリスのセシル・ビートン卿は・・・

今年の初めに亡くなったイギリスのセシル・ビートン卿は、さすが“エレガンスの審判者”といわれるだけのことはあって、昔の恋人に心憎い贈り物を残していった。グreta・ガルボ（74歳）に、十九世紀の有名なイタリアの画家の描いた一本の赤いバラの美しい油絵を遺贈したのである。何度も求婚されながら、それを断り続けたガルボ、卿亡き後も彼の真の愛を伝える赤いバラの絵を贈られて、いかなる感慨にふけっていることだろう。

婦人画報（7月号）

[許容訳例]

As might be expected of a man who was called an ‘arbiter of elegance’, the Englishman Sir Cecil Beaton, who died at the beginning of this year, left his old sweetheart a graceful present. In his will he left Greta Garbo, now seventy-four, a beautiful oil painting of a red rose by a famous Italian artist of the nineteenth century. Though she was proposed to many times, Garbo always refused. What deep emotion must she have felt on being presented, after his death, with this painting conveying his true love.

[翻訳例]

In a gesture of the man known as the “arbiter of elegance,” England’s Sir Cecil Beaton, who died at the beginning of this year, left his old flame a present of exquisite appropriateness. To Greta Garbo, now 74, he bequeathed a beautiful painting of a single red rose by a celebrated Italian artist of the nineteenth century. One can imagine the emotion that must have overcome Garbo—proposed to on countless occasions, she refused just as often—on receiving this mark of his true love from beyond the grave.

■今年の初めに亡くなったイギリスのセシル・ビートン卿は、さすが“エレガンスの審判者”といわれるだけのことはあって、昔の恋人に心憎い贈り物を残していった。

★「今年の初めに」は at the beginning of this year です。beginning の代わりに start も使えます。outset も start と同じ感じがしないわけではないのですが、これは明らかに「出だし（冒頭）」の意味ですから、普通は何かを始めようとしている時に使います。ただ、そのときでも the outset of…ではなく at the outset…という使い方が多いと思います。

★「亡くなった」は died です。ここでは「時」が示されているので was dead とすると、「・・・の時、亡くなっていた」の意味になってしまいます。

◆冠詞の有無・選択

「イギリスのセシル・ビートン卿」は the Englishman Sir Cecil Beaton とするか、新聞や雑誌でよく使われる England’s Sir Cecil Beaton です。これらの表現には「例の有名なイギリス人」というニュアンスが少し入っているかもしれません。ですから、有名な人の場合に使います。全く有名でない人でしたら Sir Cecil Beaton, an Englishman, …とします。では、

Sir Cecil Beaton, Englishman, …と無冠詞にするのはどうか。これは非常に特殊なニュアンスになります。無冠詞にすると、「イギリス人であることが非常にその人の誇りである」とか、あるいは「イギリス人のあらゆる特徴を集めたような人である」というような感じがあり、たとえば、墓石に Sir Cecil Beaton, Englishman と刻んだとすると「何よりもイギリス人であったことを誇りにしていた」というような意味になります。やはり、特殊な表現なので、ここではやめた方がいいでしょう。なお、Sir Cecil Beaton, the Englishman, …なら、「例のみんなが知っているあのイギリス人」という意味になりますからまだいいと思います。

●「連体修飾節＋特定体言」（今年の初めに亡くなったイギリスのセシル・ビートン卿）

ここは「連体修飾節＋特定体言」ですから、関係詞節を使うなら「特定名詞＋コンマ関係詞節」で、England's Sir Cecil Beaton, who died at the beginning of this year, …です。

★「さすが・・・だけのことはあって」ですが、どんな場合にも使えそうな表現としては as might be expected of[from]＋人（あるいは、この能動態「as one might expect from[of]＋人」

(e.g. As one might expect from the son of an artist, his pictures are skillfully done. さすが画家の息子だけあって、彼の絵はすごい。) がありますが、よく新聞や雑誌で出てくる表現 in a gesture[a move] worthy of…もあります。たとえば、President Carter, in a move worthy of the world's most powerful nation, did…（さすが世界の最強国だけあって、カーター大統領は・・・した。）というように使います。ここは雑誌の記事のようなので、これを使いたいと思います。

★「“エレガンスの審判者”」は the[an] “arbiter of elegance”です。このような場合の「審判者」は judge と言わずに、普通 arbiter（権威者）と言います。特に She is an arbiter of fashion. というように使います。また、referee は elegance とちょっと矛盾を感じます。

★「・・・といわれる」は…who was called…でもいいのですが、このような場合、英語としては…who was known as…という言う方が多いと思います。

★「昔の恋人」ですが、old は次に続く名詞によって「昔の」にも「年寄りの」の意味になりますから「恋人」をどう訳すかが問題になります。ところが、何でもないので、「恋人」は年齢・関係・状況などが絡むので、実に訳しにくいのです。ここで考えられるのは、sweetheart, girlfriend, flame, mistress といったところです。love, lover は問題外です。これらは年齢的に若く、love は男の言う「恋人」(My love is like a red, red rose.)であり、lover は女の言う「恋人」(Lover, come back to me.)です。ここでは使えません。mistress は「愛人」で肉体関係まで意味しています。結局、ここでは old sweetheart か old flame のどちらかですが、こういう種類の文章（婦人雑誌の記事）には old flame の方がいいような気がします。sweetheart には純粋さと若さが感じられますから、かえって面白いかもしれません。

★「心憎い（贈り物）」は one word で言い換えることはできません。「心憎い」には exquisite の意味も入っていると思われるので、a present of exquisite appropriateness でしょう。なお、ここで graceful を使うと、面白い効果を出すことができます。a graceful present と言うと、

graceful は present を修飾しているのですが、Sir Cecil Beaton の gesture が graceful だということにもなるのです。修辞学で言う、一種の prolepsis（文法では transferred epithet）的な使い方と言えるでしょう。「卿がしかじかの贈り物をした」「素敵！」という感じです。

★「残していった」は left でしょう。leave something for somebody（ここで言うなら left a present of...for his old flame）という形にすれば「残していった」という感じが出ます。

● {単位情報} の順序を変える。

「今年の初めに亡くなったイギリスのセシル・ビートン卿」のところに「特定名詞＋コマ関係詞節」にしなければならないので、英語では、「さすが“エレガンスの審判者”といわれるだけのことはあって(In a gesture of the man known as the “arbiter of elegance,”), 今年の初めに亡くなったイギリスのセシル・ビートン卿(England’s Sir Cecil Beaton, who died at the beginning of this year,)は、昔の恋人に心憎い贈り物を残していった。(left his old flame a present of exquisite appropriateness.）」と順序を変えた方が自然に情報を結ぶことができます。

■グレタ・ガルボ（74歳）に、十九世紀の有名なイタリアの画家の描いた一本の赤いバラの美しい油絵を遺贈したのである。

★「グレタ・ガルボ（74歳）」を日本語と同じように Greta Garbo (seventy-four years old) と括弧を使うのは感心しません。Greta Garbo, seventy-four,...のようにします。

★「十九世紀の有名なイタリアの画家の描いた」は by a famous[celebrated] Italian artist of the nineteenth century でしょう。なお、artist の代わりに painter も使えますが、一本の赤いバラの美しい油絵」で oil painting を使うなら音が重なるので避けた方がいいでしょう。

★「一本の赤いバラの美しい油絵」は多少表現過多です。美しくない絵などないし、絵といえば油絵でしょう。しかし、この表現の重心は「一本の」にあると解釈できます。したがって、a beautiful (oil) painting of a red rose ではなく a beautiful (oil) painting of a single red rose とすると形が表れて来ます。なお、冠詞は a（不定冠詞）です。the（定冠詞）にすると「例の赤いバラの絵」か、あるいは「いくつかある絵の中の赤いバラを描いた絵」という意味になります。

★「遺贈する」は leave somebody something in one’s will ですが bequeath を使うと in one’s will が消えます。辞書には devise も出ていますが、これは法律用語です。

■何度も求婚されながら、それを断り続けたガルボ、卿亡き後も彼の真の愛を伝える赤いバラの絵を送られて、いかなる感慨にふけていることだろう。

★「何度も」は many times ですが、ちょっと大げさに on countless occasions も使えます。

★「求婚される」は be proposed to です。

★「断る」は refuse（拒む）でしょう。reject（拒絶する）は激しすぎます。

★「(断り)続ける」はそのたびごとに断ったのですから just as often とか、always, constantly, consistently, invariably などの副詞で表します。continue to は「一度したことをさらに続ける」ということですからここでは使えません。

★「卿亡き後も」は「卿が亡くなった後に」で after he died/ after his death でいいのですが、この記事の書きっぷりからすると、ちょっと平凡な感じがします。イギリスの婦人雑誌なら from the other side of the grave とか from beyond the grave などのような表現を使うと思います。

★「彼の真の愛」は、英語では his real love ではなく、普通、his true love というでしょう。

★「伝える」は convey でも通じますが、ここは「(彼の真の愛の)印の・・・」(this symbol[sign; mark] of his true love ぐらいでいいのではないかと思います。

★「贈られて」ですが、「人に物を贈る」は present somebody with something あるいは present something to somebody です。なお、ここでは「・・・を贈られて」を「・・・を受け取って」(received)と言い換えることもできます。

★「感慨にふける」は give oneself up to deep emotion とか be filled with deep emotion, あるいは簡単に feel deep emotion などです。

◆感嘆文の間接話法（英語では直接話法の文を地の文に入れることを嫌う）

「いかなる感慨にふけっていることだろう」は疑問文（・・・ことだろうか？）にも感嘆文（・・・ことだろう！）にも解釈できます。こういう日本文に出会うと、つい、What deep emotion is she ...? [she is...!]と訳したくなります。直接話法の文をそのまま地の文に混ぜるのは日本語では当たり前だからですが、前にも書いたように、英語では普通ではありません。特に What...とか How...は、最後まで読まないで疑問文なのか感嘆文なのかわからないので避けるのが普通です。文法的には What deep emotion must she have felt...?/ With what deep emotion must she have been filled...?としても間違いではないのですが、慣習として直接話法をそのまま地の文に入れないのです。英語では、直接話法はどういう言い方をしたかに関心があり、間接話法はどういうことを言ったのかに関心があります。この場合、直接話法である必要はなく、日本語の直接話法の文の間接話法に変えて訳すことになりますが、感嘆文の場合、間接話法にする一定の法則はなく、直接話法の内容を創作的に書き換えることになります。たとえば、江川泰一郎氏の『英文法解説』では、W. S. Allen: *Living English Structure* (Longman, 1974)から”What a noise you’re making! Do you call that playing the piano?” he said to her. → He gave an exclamation at the noise and asked her if she called that playing the piano.という例を引いています。ここでは、簡単に言えば「感慨たるやいかにばかりか」ということなので、「いかに感慨にふけっているか想像することができる」と言い換えて地の文にするといいのです。つまり、One can imagine the deep emotion that she must have felt... [that must have overcome her/ that must have filled her with].と処理するのが自然な英語です。

●複数の {単位情報} を連結する

最後の文は連体修飾節が二つあったり、時の副詞句（あるいは副詞節）があったりして、かなり複雑な文章になっていますが、情報の論理展開は簡単で

ガルボはどんなにか感慨深かっただろう（話者の推察）

（だって）何度も求婚されて、断り続けたのに（事実）

赤いバラの絵を遺贈された（事実）のだから

です。

まず、「話者の推察」ですが、「だろう」という話者の主観は、日本語では「感慨深かった（主動詞）＋だろう（付加動詞情報）」という形で文末に示されますが、英語では、「付加動詞情報（() have been）＋準動詞形本動詞」と、前方の述語動詞のところで示すということです。

一般に、「付加動詞情報(added verb-information)」を言語情報の観点からすると、四つに分類することができます。

A. 本動詞に別の動詞機能や継続・終始・中止・終了・試行、などを付加する。(be+ing, come+to-root-form, stop+ingform, cease+to-root-form, etc.)

B. 主語の意志・感情・意向・判断などを付加する。(want, like, expect, regret, remember, forget, etc.)

C. 話者の感慨・判断などを付加する。(法助動詞； have+p.p., seem, appear, etc.)

D. 主語・話者以外の意志[規則・約束・状況、など]の情報を付加する。(be [have, ought, used, etc.] + to-Inf.)(be+p.p.)

そして、これらを同時に使わなければならない場合は、だいたい、

C.（話者主観）＋B.（主語主観）＋A（別動詞機能）＋準動詞形本動詞

の順序になります。ここはC.ですから、カッコの中に must を入れて、

ガルボはどんなにか感慨深かった＋だろう（話者の推察）

What deep emotion Garbo must have felt.

となります。この段階で全体をまとめると

ガルボは赤いバラの絵を贈られ（事実）＋[て]、どんなにか感慨深かった＋だろう（話者の推察）

What deep emotion Garbo must have felt when she was presented with a painting of a single red rose.

となりますが、英語では感嘆文を地の文にそのまま入れるのを好まないで、発言の趣旨（内容）を間接話法に言い換えて表しますと

One can imagine the deep emotion that Garbo must have felt when she was presented with a painting of a single red rose.

が候補に挙げられます。これに

①ガルボは何度も求婚され [ながら], それを断り続けた.

Garbo was proposed to many times, but she always refused.

Although she was proposed to many times, Garbo always refused.

②卿亡き [後]

after he died/ after his death

③その赤いバラの絵は彼の真の愛を伝えるものだった.

The painting of a single red rose was a symbol [mark; sign] of his true love

を加えることになります。①は Garbo に、③は a painting of a single red rose に連体修飾節として懸かるのですが、①は「連体修飾節+特定体言」なので、関係詞節を使うなら「特定名詞+コンマ関係詞節」にしなければなりません。③は「連体修飾節+不定代名詞的体言」なので「名詞+関係詞節」が可能です。上の候補文に①と③を加え、②は was presented に懸かる時の副詞なのでその近くに入れると、

One can imagine the deep emotion that Garbo must have felt when Garbo, who was proposed to many times, but she always refused, was presented, after his death, with a painting of a single red rose which was a symbol of his true love.

となります。連結辞に工夫を加えて整えると、

One can imagine the deep emotion that Garbo must have felt—proposed to many times, she always refused—when she was presented, after his death, with a painting of a single red rose as a symbol of his true love.

となります。ただし、Garbo と proposed to の距離が長いので、さらに工夫を重ねます。

One can imagine the emotion that must have overcome Garbo—proposed to on countless

occasions, she refused just as often—on receiving this mark of his true love from beyond the grave.

なお、「何度も求婚されながら、それを断り続けたガルボ」のところを Though she was proposed to many times, Garbo always refused として前置しないで、ダッシュ（一）で囲って後置したのは、未了解情報（日本文を読んだ人には了解情報ですが）を（読んでない人に）了解情報であるかのように処理したくなかったからです。

翻訳というのは異言語の文化を知っていて異言語を読める人のためのものではなく、異言語も異言語の文化も知らない人に読ませるためのものでなければならないのです。母語によるイメージを異言語の文法に即して配置しながら未知な文化を比喩的対比で理解させるのが翻訳文ということになります。